

## 海外の話題

### 「不満の冬」の再来か

農林中央金庫 ロンドン支店長 高島 浩

英国では、1978 年末から 1979 年初までの社会情勢を「不満の冬」と呼ぶらしい。ものの本によると、経済が英国病といわれている時期のことで、公共サービス部門がストライキを行い、病院、学校の機能停止等が発生し、結果としてこれらの現象は社会に多くの不満を生み出すこととなったことからそう呼ばれるようになったとのことである。

現在の英国は、英国病といわれるような状況は既になくなってきているが、リーマンショック以降の鬱積した国民の不満や、政府による大幅歳出削減等に対する不満が膨れ上がっているため、「不満の冬」の再来かといわれるのもおかしい表現ではないように思われる。

その不満のいくつかをご紹介します。

#### ○不満 その 1 学生による授業料引き上げ反対のデモ

英国（正確にはイングランド地区）の大学授業料の上限は現在年間 3,290 ポンド（約 44 万円）と定められているが、政府は最高 9,000 ポンドまで大幅に引き上げる改革案を提出している。大幅な値上げとなるため相当の反響を呼び、反対デモが行われている。11 月には一部参加者が暴徒化し、35 名が逮捕される事態にまで発展した。その後の各地でデモが行われており、沈静化に兆しはない。

#### ○不満 その 2 地下鉄の度重なるストライキの実施

地下鉄職員が人員削減に反対し、9 月以降断続的に 24 時間ストを 4 回実施。ロンドンの地下鉄利用者 350 万人がバスなどの代替交通手段による移動を強いられることとなった。この地下鉄のストは、今年度も継続する雲行きである。ロンドンに駐在する筆者を含めて大きな被害を被っている。

#### ○不満 その 3 消費税の引き上げ他実質的な物価上昇

不況と呼ばれている中ではあるが、食料品価格は 4.4% 上昇している。その他ガソリン、光熱費、衣料も値上がりをしている。これに加えて、年初より消費税が 2.5% 引き上げとなり 20% となった。鉄道料金も値上げが見込まれており、消費者にとっては多大な痛手となっている。

また、こうした不満に加えて、欧州のいくつかの国が抱えるソブリンリスクが英国に与える影響を不安に思っている状況でもある。まさしく、内憂外患が絶えない状況である。本当に「不満の冬」になってしまうのではと、英国に駐在する者として不安になってくる。

一方で、明るい話題もある。今般のウィリアム王子の婚約発表は英国国民にとっては久々の明るい話題となっている。相応の経済効果も期待されるし、なんと言っても結婚式当日は休日となり、イースター休暇と併せると、4 月から 5 月にかけて 4 連休が 2 週連続で取ることができる。ただし、これも中小企業者にとっては打撃となり、休日の増加は 60 億ポンドの損失となるとの報道もある。どうやら不満の種は絶えないようである。